

戦後復興期若者文化の一断面

—「アプレ犯罪」を中心にして—

市 川 孝 一

はじめに

“犯罪は世につれ、世は犯罪につれ”——犯罪はまさに「社会の鏡」である。多くの風俗現象同様犯罪もまた、時代の人々の意識（社会心理）を反映している。

また、若者文化は時代の社会心理を最も尖鋭な形で反映するのが常である。あるいは、サブカルチャーとしての若者文化は文化全体の動きに先行し、しばしば“時代を先取りする”のである。われわれが、若者文化や若者現象に注目するのは、まさにその点にある。

戦後の混乱期・復興期に「アプレゲール犯罪」と呼ばれた若者が引き起こした一群の犯罪が存在した。「光クラブ事件」「日大ギャング事件」「バー・メッカ事件」などである。これらはいずれも若者が主人公であるという意味では、若者現象でもある。つまり、これらの事例は上で述べたような意味で、二重に時代を反映しているということになる。そのため、これらの事件は時代の「社会心理」を探るためには、格好の「素材」だということになる。

本稿では、これらの事例を再検討することによって、事件の社会的背景やその背後に隠されている時代の「社会心理」の一端を探っていきたい。

アプレとは何か？

アプレあるいはアプレゲールとは何か。辞書や事典ではどのように説明されているか再確認しておこう。

- * アブレゲール【après-guerre フランス】（戦後の意）①第一次世界大戦後、フランスを中心として興った文学上・芸術上の新しい傾向。②転じて、第二次世界大戦後の若者の放恣で退廃的な傾向。また、その傾向の人。戦後派。アブレ。（『広辞苑』）
- * ②戦後派。日本で第二次世界大戦後、野間宏・中村真一郎などが旧世代の文学者と自らを区別するために用いたが、のちに無責任・無軌道な若者たちをさすようになった。アブレ。（『大辞林』）
- * 敗戦後の昭和20年代の混乱の中で、享楽的で、無頼、ニヒル、軽薄、軟弱、デカダンスなどの、良識から外れた青年世代の行動傾向の総称。（『大衆文化事典』）
- * アブレ・ゲール（après-guerre）は、たんに「戦後」を意味するフランス語だが、日本では戦後という時代をわがもの顔にのし歩く青春群像を意味することとなった。（『戦後史大事典』）

以上がいわゆる辞書的な意味だが、加太こうじの次のような要約が、本稿で使用する「アブレ」「アブレゲール」の意味を的確に解説しているように思われる。——「……日本ではその戦後派という言葉が太平洋戦争後の様々な新傾向の文学運動に使われた。『戦後派新人創作選』という小説集が昭和22年に発行されたが、それは“アブレ・ゲール・クリアトリス”⁽¹⁾とも言われていて、野間宏の『暗い絵』、中村真一郎の『死の影の下に』、福永武彦の『塔』、安部公房の『粘土』などがふくまれていた。この小説集以後アブレ・ゲール、略してアブレという言葉が、戦前戦中のウェットな思考を持つ人々に対する戦後派のドライな思考と行動を持つ若者の代名詞として使われたのである」（加太、1974、137頁）。

光クラブ事件

まず、その第一の事例として「光クラブ事件」を取り上げてみたい。この事件は、現役の東大生が「ヤミ金融」会社を立ち上げ、いっとき華々しい「成功」をみるが、すぐに行き詰まり主人公の自殺で結末を迎えるという、一言でまとめてしまえば実にあっけない一青年の挫折の物語である⁽²⁾。

もう少し詳しく事の経緯を見て行こう。——1948（昭和23）年9月、現役の東大生・山崎晃嗣^{あきつぐ}（26歳）は、友人の三木仙也（日本医科大生）とともに

に中野区鍋屋横丁に貸金業「光クラブ」を設立した。「遊金利殖 月1割3分」「確実と近代性をほこる日本唯一の金融会社」が謳い文句だった。出資者には、出資利息月1割3分を払い、月2割1分から3割の高利で短期貸し付けをする。この差額分が利益となる、「安く資金を調達して、高い利息で貸し付ける」という極めて単純な仕組みである。

現役東大生が始めた一風変わった金融業ということで、「学生社長」は話題を呼び事業は急速に伸長し、発展を遂げた。翌、1949（昭和24）年1月には、銀座に進出。資本金600万円、株主400名、社員30名という規模にまで膨れ上がった。

当時とりわけ人々の目を惹いたのは、派手な広告戦略だったといわれる。新聞広告はもとより、銀座の中央に設置された巨大な広告塔は、雑誌などの写真にも残っており良く紹介されるものだが、インパクトと迫力のあるもので、とりわけ当時としては訴求力が大きかったであろうことは十分にうかがえる。

しかし、同じ1949（昭和24）年7月、物価統制令および銀行法違反容疑で京橋署に逮捕される。山崎は得意の法律知識によって、検事と渡り合い9月には、いったん処分保留で釈放されるが、動揺した債権者の債権取り立てに会い行き詰る。その時点での、負債額は約3,000万円、債権者は約400人ほどだったといわれている。そして、事業に自ら見切りをつけた山崎は、同年11月24日、青酸カリ服毒自殺した。享年27歳。

以上が、事件のあらましだが、その時に山崎が残した遺書が次のようなものである⁽³⁾。

- 一、御注意、検死前に死体に手をふれぬこと。法の規定するところなれば、京橋警察署にたゞちに通知し、検死後、法に基づき解剖すべし。死因は毒物。青酸カリ（と称し入手したるものなれど、渡したる者が本当のことをいったかどうかは確かめられたし）。死体はモルモットとともに消却すべし。灰と骨は肥料として農家に売却すること（そこから生えた木が金のなる木か、金を吸う木なら結構）。
- 二、望みつつ心安けし散るもみじ理知の命のしるしありけり
- 三、出資者諸兄へ、陰徳あれば陽報あり、隠匿なければ死亡あり。お疑いあればアブハチとらずの無謀かな。高利貸し冷たいものと聞きしかど死体さわれればナル……氷カシ（貸し——自殺して仮死にあらざる証依而

如件)。

四、賃借法すべて清算カリ自殺。晃嗣。午後 11 時 48 分 55 秒呑む、午後 11 時 49 分……

死に直面してまで、アイロニカルに駄洒落を駆使した自己譚話を弄する根性は、見上げたものだが、絶命の直前まで記録するところは分刻みの日記を書いていた、いかにも山崎らしい最後かもしれない。

そして、この遺書の根拠となったのは山崎の徹底した合理主義である。それは、彼自身の言葉で次のように語られている。——「私の合理主義をもってすれば、人間と人間の関係は Paeta Sunt Servanda 合意は拘束されるべしという国際法の基本原則で割切れる。……（中略）……この合意による拘束を免除するのは、事情変更の法則だけである。……（中略）……契約は人間と人間を拘束するもので、死人という物体には適用されぬ。私は事情変更の原則を適用するために死ぬ、私は物体にかえることによって理論的統一を守る」（山崎、2006、134-135 頁）。

この点に関して、高木彬光は次のようにコメントしている。——「……これがふつうの人間なら、『借金が返せなくなって、債権者のみなさまに申し訳ないから、死んでおわびをする』とすなおに書くところだろう。こうして、自殺の理由にさえ、ひとりよがりの理論を持ち出して裏づけしようとしたところに、私は彼の歪んだ人間性のあらわれを見るような気がする」（『戦後異色人物探検⑫ 山崎晃嗣（下）』『週刊現代』1962 年 6 月 17 日号）。

確かに、そうと言えないこともないが、むしろそこには「挫折」や「敗北」を素直に認めたくない山崎の意地のようなもの、何ものかに対する強い怒りの感情がにじみ出ているようにも思われる。

衝撃的なこの事件と主役山崎の特異な性格については、多くの作家が創作意欲を刺激され、次のような作品を残している（中には映画化されたものもある）。—— 田村泰次郎『大学の門』（イヴニングスター社、1948、映画「大学の門」新東宝、1948）、三島由紀夫『青の時代』（新潮社、1950）、北原武夫『悪の華』（日本文芸家協会編『創作代表選集第 7 巻』講談社、1951 所収）、高木彬光『白昼の死角』（光文社、1960、映画「白昼の死角」東映、1979）。

山崎晃嗣の人物像の分析はそれらに任せるとするが、ここでは彼の特異な性格を最もよくあらわしていると思われる一例だけを紹介しておこう。有名な彼の日記である（表 1 参照）。そこには、一日の行動が分刻みで記録され

表1 山崎のある日の日記

●山崎日記の一例●

6日(土曜) 快晴

	1時半	6時半	9時半	11時半	13時半	15時半	17時半	22時半
(体温)	36.2℃	36.35	36.55	36.65	36.45	36.55		35.9
(室内)		3.0	6.0			11.0	9.0	8.0
(コタツ内)		28.0	30.0	31.0		32.0		32.0

6 土	0.00				...	⑤	25	反省, 思索
	0.25	②	25	ロウマ法 a5 作-2		○	40	呆然, 空想
	:	②	10	" a6 作-1	13.25			
	0.45	○	10	日 記 etc	14.35	◎	70	睡 眠
	:	○	15	間食, 空想	15.00	○	25	用 務
	:	②	10	ロウマ法 a6 作-2	16.00	①	60	ロウマ法 a4 暗 1-8
1.20	○	10	就寝準備		17.15	①	75	経済原論 a4 の 2-3
2.00	○	40	空想, 妄想		17.30	○	15	体操, 日記 etc
5.30	◎	210	睡 眠		21.30	△	240	智子と性交, 料理食事, たはむれ etc
5.45	○	15	用 務					
6.20	①	35	ロウマ法 a1 暗 0	22.00	△	30	智子見送	
7.05	①	45	" a2 " 6	22.05	○	5	用 務	
7.20	①	15	" a3 " 4	22.15	①	10	ロウマ法 a5 暗 1.....2	
7.40	①	20	" a4 " 1-7	22.10	○	5	日 記	
8.25		45	朝食, 新聞 etc	23.35	②	75	経済原論 a10 作-2	
8.35	1	10	ロウマ法 a5 暗 1-1	24.00	②	25	" a11 作-1	
:	2	10	" a6 作-3					
8.50		5	用 務	7 日 0.00				
9.15	1	25	経済原論 a2 の 4	0.20	○	20	整 理	
9.40	1	25	" a3 の 3	6.10	◎	350	睡 眠	
10.10		30	洗ひもの etc	6.50	○	40	片附, 準備, 体操 etc	
10.50	1	30	経済原論 a4 の 2-2	7.10	①	20	ロウマ法 a3 暗	
11.20	2	20	ロウマ法 a6 作-4	7.55	○	45	" a4 " 2	
:	○	60	用務, 郵便局, 風呂屋 etc	8.05	○	10	日 記	
				8.25	①	20	経済原論 a1 の 6	

●時間用途表●

○ 総有益時間 1~6 合計

◎ 睡眠時間 仰臥してむねぬ時間も含む

○ 中立時間 映画, 演劇, 絵画, 音楽観覧, 下劣ならざる小説, 日記, 計画, 新聞, 事務的会話

△ 女色時間 多田智子 (35 歳) とあそぶ時間

坂田和子 (21 歳) "

○ 無益時間 雑念, 妄想, 空想, 呆然, 不要会話無意味な行為, 通俗下等読物

① 無益時間 1 等 大学及高等試験用抜粋暗記又は世界観反省及受験中

教科目及高等試験につき○試験用抜粋暗記

② " 2 " 抜粋帳作成, 講義, ノート, テキスト閲読○

教科目及高等試験につき比較的直接的参考書閲読

③ " 3 " 哲学, 高級教養書, 古典 反省記述

教科目及高等試験につき比較的間接的参考書閲読

④ " 4 " 法経一般, 通常教科書, 外国語, 知識拡充のための一般書, 思索

⑤ " 5 " 有益な人生論的会話, 事件記述, 手紙, 高級な小説,

雑務しつつの暗記 (テキストみない)

⑥ " 6 " 有益な学術的会話

(出所) 『女性改造』1950年2月号

ている。睡眠、食事といった日常的な生活行動はもとより、最もプライベートな性にまつわるものまで事細かに書きとめられている。しかも、それらを「有益度」の観点からランク付けまでするという念の入れようである。体温を頻繁に測り、コタツの中の温度まで測定している。これは「几帳面さ」を通り越して、病的な「偏執狂」の域に達していると言えよう。

素人の心理分析は、閑話休題として、この事件の持つ意味という本題に戻ろう。この事件の背景には様々な要因が存在する。——大きくわければ、山崎晃嗣という人物の個人的な要因、そして彼の生きた時代や社会的背景である。それらについては後に再度検討することになるが、もっと分かりやすく、たとえば、山崎自身が、「財務協会」というインチキ投資グループに10万円をだまし取られたという直近の経験を事件の直接のきっかけとする見方もあるし、また、千葉の名家に生まれ、一高・東大というエリートコースを歩んだ一青年の挫折と破滅の物語という単純な図式化も可能であろう。

当然のことながら事件当時はもとより、この事件については非常に多くの週刊誌や雑誌記事が書かれているが、一番事件の本質を鋭く指摘しているのは、保坂正康（2004）の“時代への怨嗟”ということばではないかと思う。——「山崎は何かに『怒り』をもっていた。それは歴史上で俯瞰すれば、『戦争という時代』に、そして一個人として自省すれば、自らの環境そのものにもつ怒りだったといえるかもしれない」（保坂、2004、60頁）。

つまり、社会に衝撃を与えた事件の主役に山崎を変えたのは、彼の軍隊経験・軍隊生活で遭遇した二つの出来事が大きな意味をもっているということだ。ひとつは、敗戦直後の軍隊の物資横流し事件により、2か月以上の獄中生活を送ったことである。これは、上官や仲間の裏切りによって、山崎一人だけに罪が着せられた結果だった（同、107頁）。

それ以上に山崎にとってショックだったのは、同じ部隊に属していた一高時代からの友人のリンチ死事件だったという。しかも、この時には上官の命令によって隠蔽工作までさせられている（同、113頁）。この二つの経験がまさにトラウマとなって、山崎の根源的な「人間不信」につながったのではないかというわけである。

そう考えると、何よりも事件は戦争の後遺症が引き起こしたものであり、その意味で山崎もまた戦争の犠牲者の一人だということになる。戦争とは、「非合理」「不合理」の極みである。合理主義者の山崎が、もっとも耐えられないものであったことは、まさに「合理的」な結論であろう。

日大ギャング事件（オー・ミステイク事件）

二つ目の事例は、「日大ギャング事件」または、「オー・ミステイク事件」と呼ばれるものである。この事件は次のようなものである。——1950（昭和25）年9月22日、日本大学本部詰め運転手・山際啓之（19歳）が同僚の乗った車を襲い、同大職員の給料約190万円を強奪した。この際に、同乗していた同大の職員にナイフで大けがを負わせている。

その後、恋人の日本大学文学部教授・藤本藤次郎の娘・藤本^{さぶみ}左文（18歳）と高飛びをはかる。二人は夫婦を装い、CIE（GHQの民間情報教育局）所属の二世と称して品川区の下宿に潜伏中のところを、逮捕される。事件からわずか二日後の、9月24日のことであった。

警察に踏み込まれたとき、山際は左文に向かって、「オー・ミステイク！」と肩をすばませ、両手を広げる外国人特有の身振りをしながら叫んだという。一躍この言葉は流行語となり、この事件は、「オー・ミステイク事件」とも呼ばれるようになった。

山際の「アメリカかぶれ」は相当なもので、現金輸送車を止める時も、「ヘイ・スタップ」と叫んだといわれている。腕には「ジョージ」と入れ墨を彫っており、取り調べに対しても英語（米語）交じりで答えたという。

事件当時の「天声人語」は、「……なんの悪びれもなく、実に堂々とカメラにおさまっている。これは不思議なことだ。悪度胸なのか、罪悪感がないのか、わからない。若い犯罪者が落ち着き払った態度の写真を見るごとに、その背後から、薄気味の悪い世相がのぞいているようで、不可解な気がする。……」（『朝日新聞』1950年9月26日）と嘆いているが、先行世代にとって彼らはまさに“理解を超えた存在”であり、“恐るべき子どもたち”“恐るべき若者たち”であった。

一方、同世代の若者の中には、これとはいささか異なった反応を示した者もいたようだ。正確に言うと少し下の世代に属するが、映画監督の恩地日出夫は、次のように回想している。——『「オー・ミステイク事件」も『光クラブ事件』も、当時ばかりは高校生で、新聞で事件の報道を見たときに、何かとてもうらやましいというか、あこがれというか、そんな感じを持った記憶があります。なぜこういう犯罪に対して、ある種のあこがれを感じたのかと、いまふりかえて考えてみますと、敗戦によって価値観が逆転した。何を信

じていいのかわからない、価値のあるものというのは何なのかということを感じながら、高校生なりに一生懸命考えている中で、いままでそうやってきた大人たちに対してとにかく反抗したいという気持ちは、ぼくの心の中に強くあったと思うのです。……（中略）……そういう中で、これは犯罪ということでニュースになっているのだけれども、少なくとも権威に反抗して自分自身の価値基準の中で生きている、という面で、あるあこがれの対象として、ぼくはとらえていたように思います」（作品社編集部編、1984、193頁）。

また、この事件をとりあげ長大な特集記事を掲載している週刊誌は、事件を巡るキーワードとして、「英語崇拜」「天衣無縫」「おしゃれ」「衝動的」「世間知らず」「享乐的」などをあげている（『裁かれる“アプレ”』『週刊朝日』1951年1月21日号）。とりわけ「衝動的」はこの事件の性格をよくあらわしている。山際が犯罪を思いついたのは、実行のわずか三日前で、周到に計画するようなことは全くなかった——という弁護士の証言も引用し、記事は次のように続ける。——「……いわゆるアプレ犯罪は、戦後、いろいろあったが、とにかくそこには、犯罪らしい一つの型（計画的、動機、目算）というものがあつた。が、この事件には、いわばそういった旧来の意味における犯罪の臭いを感じられない」（同）。確かに、現金強奪事件としては、あまりにもその手口が無計画で拙劣である。

もう一つのキーワード「英語崇拜」は、次のことを思い起こさせる。——敗戦直後には、メディア史上有名な二つの“英（米）語ブーム”があったことが良く知られている。『日米會話手帳』（科学教材社〈誠文堂新光社〉、1945年9月）の、360万部という空前のベストセラー化。“カムカム英会話”の愛称で人気を呼んだ、昭和21（1946）年2月1日から放送が始まったNHKラジオの「平川唯一先生の英会話教室」の大人気である。戦中は、「敵性語」として滑稽なほどまでに排除されてきた英語（米語）に飛びつく日本人の“変わり身の早さ”は、それ自体研究のテーマになるが、山際の「英語崇拜」ぶりもかなりのものだったらしい。

潜伏先の部屋を貸した女主人は、次のように証言している。——山際は部屋に入るなり、「オオ・ナイスルーム」と仰山な身振りで手を広げた。……「私の親戚の者もカリフォルニアにいますのよ」と私がいうと、「アー、“カリフォルニヤ”ネ。ホントニイイトコ……。 “チャンスコ”（サンフランシスコ）ハトクニネ……」と目を輝かせました（前出『週刊朝日』記事）。つまり、山際はいかにもネイティブらしい米語(!?)と片言の日本語で会話を

し、日系二世を必死に演じていたわけである。

先にも述べたように、この事件をきっかけに、「オー・ミステイク」は、一大流行語となるのだが、加太こうじは次のように言う。——「いかにも軽薄で、アメリカ的風潮の悪いところを身につけて、それを新しいことと思いきんで得意になっているアプレの様子が、その一言に象徴されているように感じられた」（加太，1974，143頁）。

また、この事件は当時の世相風俗としての、「アメリカ的享楽」をよく示す一例であり、それを次のように断じる。——「世の中のゆがみが、弱い人間に反映して犯罪を起こさせるとするなら、アメリカ的にゆがみだした世の中が、知能が少し低くて意志も薄弱な山際と佐文に反映したのが、このオー・ミステイク事件かもしれない」（同，147頁）。

この事件は、一連の「アプレ犯罪」の中では最も「風俗的」な事件である。そして、上記のキーワードの中の「天衣無縫」や「おしゃれ」⁽⁴⁾は、言葉自体には肯定的ニュアンスが含まれるものである。この事件に対する反響は概して深刻さを欠いている。主役のふたりの男女の軽薄さ幼稚さに人々が単純に“驚きあきれる”ことが出来たのは、けが人こそ出たものの、この事件が「死」とは無縁であったことが関係しているかもしれない。

いずれにしても、この事件を通して浮かび上がる苦笑を禁じ得ない「アメリカかぶれ」ぶりは、占領期日本のあるいは「アメリカ植民地」日本に咲いた「あだ花」のなかでも、もっとも滑稽な一輪と言えるかもしれない。少なくとも、そこに映画「俺たちに明日はない」⁽⁵⁾のボニーとクライドのような、また「三億円強奪事件」（1968年）のような「格好よさ」(!?)はない。

バー「メッカ」殺人事件

三つ目の事例は、「バー『メッカ』殺人事件」である。1953（昭和28）年7月27日、東京・新橋のバー「メッカ」で、客がビールを飲んでいると、天井から血が滴り落ちてきた。店のマスターが調べさせたところ、物置になっていた天井裏（中3階の押し入れ）から毛布に包まれた男の死体が発見された。鈍器でめった打ちにされ、首と両足を電気コードで縛られていた。

被害者は、証券ブローカー博多周（39歳）と判明、所持金の約40万円が奪われていたことも明らかになった。容疑者として、「メッカ」のボーイ近藤清（20歳）、被害者の知人元証券会社社員の正田昭（24歳）、正田のマー

ジャン仲間の相川貞次郎（22歳）の3人が全国指名手配された。7月29日に相川が逮捕され、8月4日には近藤が自首したが、主犯の正田は2カ月以上後の10月12日にようやく潜伏先の京都で逮捕された。捜査は20年ぶりの全国捜査で、指名手配写真が7万5千枚も配られるという大規模なものであった（「メッカ殺人事件」『週刊読売』増刊号、1957年10月1日号）。また、正田の母親が、「昭や、お母さんよ。自首しておくれ……」と、ラジオで涙ながらに訴えるという、いかにも「日本的」な手法もとられたという（「事件のその後 文学に生きる殺人犯 バーメッカ事件の正田昭」『人物往来』1964年10月号）。これは、「あさま山荘事件」（1972年）の際に山荘に立てこもって抵抗を続けた犯人（と思われた男性）の母親がハンドマイクで「投降」を呼びかけたシーンを思い起こさせるが、正田昭が生後5か月の時に父親が亡くなってから、女手一つで6人の子供を育て上げた母親（支配的かつ溺愛した母親にも一因ありという論評もあるが）には、あまりにもむごい仕打ちであった。

逮捕時、正田は「小生はただ、ナット・ギルティ（無罪）を主張するだけです」と英語交じりで語り犯行を否認したが、18日になって「義理ある人（恋人の母親）から預かった株券を売却処分していまい、その金を返したい一念からやった」と自供した。

正田は、慶応大学経済学部卒の「美青年」。犯行が、女遊び、マージャン、ダンスなどの遊興費に絡んでいたことから、マスコミは「アプレ犯罪」の典型として取り上げた。

遊びや自分の楽しみのためだったら簡単に人殺しまでしてしまう、そのことに世間は驚いたのである。そして、その犯人が一見殺人事件とは結びつきにくいイメージの高学歴の「イケメン」青年であったために、センセーショナルに報じられることになった。この事件もまた、大衆メディアが喜ぶ「風俗的」な事件であった。

正田には、1956（昭和31）年、東京地裁で死刑判決が下された。1960（昭和35）年には、東京高裁で控訴棄却。1963（昭和38）年、最高裁でも上告が棄却され、死刑が確定した。その間、正田は獄中でカトリックに入信、熱心な信者となり、小説の執筆も始めた。「サハラの水」という作品は、1963（昭和38）年『群像』新人賞候補となった（投稿722編中の最終5編に残り、同年9月号に新人賞候補作として掲載された——前出『人物往来』記事参照）⁶⁰。また、1964（昭和39）年から1965（昭和40）年にかけて、

『犯罪学雑誌』に死刑囚の獄中手記を連載した。この連載は後に『黙想ノート』のタイトルで単行本として刊行された（みすず書房、1967）。1969（昭和44）年12月、東京拘置所で死刑が執行された。享年40歳。精神科医官・小木貞孝として正田に出会い、濃密な交流を持った加賀乙彦は、正田昭をモデルにした長編小説『宣告』（新潮社、1979）を書いた。

その他のアプレ犯罪

「日大ギャング事件」と同じ昭和25（1950）年に起きた鉾工品貿易公団横領事件も、「アプレ犯罪」の括りで紹介されることが多い。この事件は、同公団の経理課出納係・早船恵吉（25歳）が、約8,000万円を横領して逃亡、2ヶ月後に出頭し逮捕となった事件である。一緒に逃亡していた妻が、銀座のキャバレーのダンサーで元「ミス東京」だったという事実も、大衆のいわゆる“週刊誌的興味”を呼び大きな話題となった。

約8,000万円という横領額の大きさに世間は驚いたが、当時の公団総裁は記者団の追及に対し、「女中のつまみ食いのようなもの」と言っていた。そうした役人の感覚に対し、当然のことながら非難が殺到したが、この「つまみ食い」という言葉は一種の流行語となった。

それにしてもこのケースは、帳簿上の処理をするでもなく、経済犯罪としてはあまりにも杜撰なものであった。無謀で無計画、衝動的な犯行であり、幼稚な手口であると言ってもよい。これらの特徴は、前出の「日大ギャング事件」と見事に重なってくる。

さらに、1950（昭和25年）に起こった金閣寺放火事件も、アプレゲール犯罪の例としてあげられることがある。犯人が、僧侶（学生僧）の林承賢という21歳の青年だったからだ。この事件は、京都のシンボルの一つである有名な寺（鹿苑寺）が、炎上消失するという衝撃的な出来事であり、しかも犯人が他ならぬ内部の学僧であったということで世間の注目を浴びたのは当然のことであった。しかし、この事件はその原因として、社会的な要因よりも犯人の個人的な要因（人格・パーソナリティ的要因）が圧倒的に大きなウェイトを占めているので、世相・風俗的な視点からの検討対象としてはふさわしくない。

逆に言うと、作家たちにこれほど刺激を与える素材はなく、この事件を題材に三島由紀夫『金閣寺』（新潮社、1956）、水上勉『五番町夕霧楼』（文藝

春秋新社, 1963), 『金閣炎上』(新潮社, 1979) が書かれたことは良く知られている。また, これらの作品は, 何度も映画化, ドラマ化, 舞台化されて今日に至っている⁽⁷⁾。

アプレ犯罪の今日的意味

2006 年, 光クラブ事件は思わぬ形で再度注目を浴びることとなった。2006 年 1 月にホリエモンこと堀江貴文が, 証券取引法違反で逮捕された。マスメディア企業やプロ野球球団の買収問題で話題になり, 時代の寵児であった主人公の転落劇に半世紀以上前の事件が思い起こされたのである。

それは, 山崎と堀江の二人に, 「東大生」「企業家」「転落」などの共通点があったからである⁽⁸⁾。復刊された山崎の『私は偽悪者』の帯には, ずばり「元祖ホリエモン!? 劇場型人間, 山崎晃嗣の過激な問題作復刊」のキャッチコピーが躍っている。さらに, この本の帯には, 次の二つのコメントも掲げられている。——「元祖リバタリアン(自由市場主義者)見参! 山崎晃嗣は敗戦の焦土に自由を見た。人の性は『本来傲慢, 卑劣, 邪悪, 矛盾』。国家も女も信用するな。欲望と合理精神だけを武器に戦後を駆け抜けた元祖リバタリアンの言葉を聞け!」(宮崎哲弥), 「日本のエスタブリッシュメントの自信喪失期に経済界に登場し, 短期間に一世を風靡した『東大生』企業家・山崎晃嗣と堀江貴文。既成の価値観と倫理観を否定し, 合理主義を徹底的に追求した山崎は, 堀江貴文という男を読み解くのに最適のモデルだ!」(宮崎学)。

これらを見てもわかるように, 重要なのは山崎・堀江の二人には, 「東大生」「企業家」「挫折」などの“形式的”類似性だけでなく, 彼らの女性観や金銭観, まさに価値観や「思想」における共通点があるということである。

その点を同書の解説「堀江は現代の山崎か」は, 非常に分かりやすい形で対比させている。「女は道具である」⁽⁹⁾(山崎)——「女は金についてきます」(堀江『稼ぐが勝ち』), 「自分の努力で, どこまで人にすぐれるか, 能力の限界まで実現してみたかった」(山崎)——「ぼくがいつも心がけていることは, とにかくでかいことを考えて, とうてい実現できなさそうなことを考えて, それを実際に実現させるということです」(堀江『同』), 「人間社会の犯罪をも, 刑罰数量表で合理的に判断する」(山崎)——「判断基準をすべて金額に置き換えてしまえばいいわけです」(堀江『同』)等々。堀江の「人の心はお

金で買える」(堀江『同』)という発言も、非常に有名になった。

実は、堀江貴文が逮捕される前から、山崎と堀江に注目した雑誌や週刊誌の記事はすでに存在する。そのなかでも、「心の貌^{かたち} 昭和事件史発掘①「光クラブ事件」山崎晃嗣」(『文藝春秋』2005年5月号)は、すぐれた論考となっている。柳田邦男(ノンフィクション作家)がホスト役をつとめ、この回はゲストに保坂正康(ノンフィクション作家)と宮崎哲弥(評論家)を迎えて鼎談という形をとっている。

先にも紹介した、保坂の「時代への怨嗟」という発言に対して、宮崎はそれを『「時勢」に対する憤り』ということばに言い換え、次のように続ける。——「……戦時中は聖戦貫徹、一億玉砕を叫んでいたのに、敗戦をきっかけに総懺悔、民主国家の建設に豹変する。……(中略)……大概の日本人が、「時勢」に馴致していったのに、どうしても靡くことのできない、それを信じることのできない二人が、何かのはずみで触れあうことになったというのはいくらもある話です」(『同』)。

ここで二人と言っているうちの一人は、平岡公威つまり三島由紀夫その人である。保坂は、著書のなかでもそうだが、ここでも学生時代に山崎晃嗣と三島由紀夫の間に交流があったことを強く示唆している。宮崎の発言はその点も踏まえたものとなっている。

この鼎談には、他にも注目すべき論点が満載だが、ここではもう一つだけとりあげてみよう。山崎と堀江に共通する「自己中心主義」とそれと一体化している「自信過剰」についての議論である。——柳田は、二人とも十代から二十代の半ばあたりまでである種の「全能感」のようなものを持っていたのではないかと指摘する。

これに対し、宮崎は次のように応じる——「そういう全能感は、インターネット以降の世代では薄く広く共有されています。……(中略)……幼似的な全能感に裂け目を入れ、社会化していくような力が衰弱している。……(後略)」(『同』)。これは実に興味深い指摘で、今日の若者たちの心理的特性をうまく言い当てている。日々学生と接している中で筆者も常に経験させられていることと完全に符合する。幻想の全能感から根拠のない自信に満ち溢れた若者のなんと多いことか。

最後に、柳田はこの鼎談の狙いを「国家や社会経済の大変動が個々の人間の人生や価値観にどのような影響を与え、どのような新種の人間を生み出し、そういう新しい“人種”が逆にその後の社会をどのように変えていくかとい

う歴史の変転の姿をリアルにとらえること」⁽¹⁰⁾（『同』）とまとめ、山崎晃嗣を“時代の「鬼っ子」”，堀江貴文を“時代の「申し子」”と結論づけている。

「アプレゲール」と「アプレバブル」という時代背景の違いはあるが、いずれも一種の「価値混乱の時代」において、彼らの単純すぎる「思想」は、それなりのアピール力を持ち得たということである。

おわりに

最後に、改めてアプレ犯罪とは何だったのだろうか。一連の「アプレ犯罪」について、大宅壮一は次のようなコメントを寄せている。——「大きな社会変動の後には必ず国家の中にも真空地帯がポッカリ口をあける。ここへ落ちこんだのが、いわゆるアプレ族だ。年齢的には二十歳前後。もちろんこの年齢層がみんないかれているワケではない。これに“環境”が作用する。昔は社会にはシツケというものがあった。秩序正しい社会的訓練である。これがなくなった。つまり、“生活の文法”が乱れてしまった。いやむしろなくなったといった方がいい。ここに“社会の盲点”が生まれる。（後略）……」（『読売新聞』1953年8月31日）。

さすがに、大宅壮一である。いかにも評論家的な言い回しだが、社会現象の本質を見事に言い当てている。同じことを社会学的用語で言えば、「アノミー型犯罪」（間庭，1997，88頁）ということになる。「急性アノミー型犯罪」と言った方がより適切かもしれない。なぜなら、「急性アノミー」とは、「社会の中心的な価値体系の急激な崩壊によって引き起こされる混乱状態」（岩間，1995，16頁）だからである。

戦後復興期（1945年～1950年代前半）の日本社会は、まさにこの定義にぴったりの社会状況であった。社会学的用語では、「アプレ犯罪」はこのように簡単に説明がついてしまう。本稿の記述も基本的には、そうした視点から「アプレ犯罪」のネガティブな側面に焦点を当ててきた。だが、「アプレ犯罪」には肯定的と言わないまでも、何か別の視点からの見方はできないものだろうか。

これに関して間庭充幸は、アプレ犯罪という呼称について「……しかしそこには、青少年に対する非難と同時に、日本を無意味な戦争に巻き込んだ大人とその既成モラルに対する青少年の批判が暗黙に込められている点も見逃してはならない」（間庭，1997，90頁）とし、さらに次のように言う。——

「……青少年のアプレには、無軌道・放縦ではあっても（あるいはその故に）この時代特有の『開かれた』個人主義が貫いており、それなりの実在感があった」（同、99頁）。

先に引用したコメントの中で、映画監督の恩地日出夫がアプレ犯罪に対して感じたある種「あこがれ」のような感情を抱いたのは、まさにこのあたりに理由があるのだろう。軽薄で間抜けな「アメリカかぶれ」と揶揄された「オー・ミステイク事件」ですら、実は笑えない。敗戦後圧倒的多数の日本人は、「アメリカの物質的豊かさ」の前にひれ伏し、高度成長期を通じてひたすらそれを追い求めた。「植民地的メンタリティ」は、広く拡散して定着し、もはや自分たち自身もそれに気がつかないほどである。

利己主義の別名である個人主義は、高度成長期を通じて私生活主義（ミー・イズム）として生活倫理の一部に完全に組み込まれた。「拝金主義」は、バブル期にピークに達し、日本という国家や日本人という国民の代名詞までになった。「バブル崩壊」という手痛いしっぺ返しを受けながらも、「経済至上主義」という価値観は捨てられず、「格差社会」という新しい不幸が生み出されつつある。

「アプレ犯罪」の中に突出的な形で含まれていたものは、すべてその後の日本社会の展開の過程で一般化してきた。同じことでも、みんなより早くやりすぎると「逸脱」になる。みんながやれば、それはありふれた生活行動となる。

若者行動・若者現象は、まさに時代を「反映」し「予言」する。

《注》

- (1) 表記は「アプレゲール・クレアトリス」とするものもある。花田清輝「アプレ族の最初の者」『花田清輝全集』第6巻、講談社、1978、253頁。
- (2) 各事件のアウトラインの説明には、赤塚（1982）の記述をもとにし、新聞・週刊誌・雑誌の関連記事で補った。
- (3) 鴨下信一「忘れられた名文たち」（『諸君』1998年3月号）。鴨下の引用は、1949年11月26日の『朝日新聞』の記事に基づいている。
- (4) 二人は事件当日に、衣服を中心に12万円以上を使ったという。おしゃれな服装で、スター気取り(!?)でポーズを決める二人の取調室の写真は有名である。
- (5) 原題は「Bonnie and Clyde」、1930年代のアメリカに実在した男女二人の連続強盗犯を描いた1967年の米映画。アメリカン・ニューシネマの先駆的存在として有名。監督・アーサー・ペン。

- (6) 死刑囚でありながら獄中で書いた作品が文学賞を受賞したとなると、1968～1969年の連続ピストル射殺事件、永山則夫のケースを思い起こさせる。
- (7) 「炎上」(1958年、大映)、「金閣寺」(1976年、ATG)、「五番町夕霧楼」(1963年、東映)、「同」1980年、松竹)等々。
- (8) 「なぜ『東大出身』の起業家は犯罪に手を染めるのか?」(『月刊宝島』2006年9月号)という記事では、この二人に加え「リクルート事件」の江副浩正、「村上ファンド事件」の村上世彰などが取り上げられている。
- (9) これは、同書の第5章のタイトルにもなっている。そこでは、自分の愛人8人の女性について赤裸々に語られている。また、山崎は女性を「便所」にまでたとえている。彼のそのほかの発言も、すべて山崎(2006)に書かれているものである。山崎の極端なまでの女性蔑視は、母親を聖なるものとして偶像化していることと表裏の関係にあるという(後出『文藝春秋』の鼎談での保坂の発言)。
- (10) これは、表現こそ違うものの“時代と社会心理のダイナミックス”を明らかにしたいという筆者の問題意識とぴったり重なる。なお、この鼎談では「第二の敗戦」とも呼ばれる「バブルの崩壊」が、日本人の価値観や生き方に大転換あるいは質的变化をもたらした出来事だったことも強調されているが、東日本大震災(2011年3月11日)という「第三の敗戦」を迎えた今となれば、遠くにかすんでしまう。

参考文献

- 赤塚行雄編, 1982, 『青少年非行・犯罪史資料』① 刊々堂出版社
 朝日ジャーナル編, 1974, 『昭和史の瞬間』下 朝日新聞社
 岩間夏樹, 1995, 『戦後若者文化の光芒』日本経済新聞社
 加賀乙彦, 1980, 『死刑囚の記録』〈中公新書〉中央公論社
 加太こうじ, 1974, 『昭和犯罪史』現代史出版会
 小林修, 1989, 『年表 昭和の事件・事故史』東方出版
 作品社編集部編, 1984, 『読本 犯罪の昭和史2』作品社
 佐々木毅・鶴見俊輔他編, 2005, 『戦後史大事典 1945～2004』三省堂
 世相風俗観察会編, 2009, 『増補新版 戦後世相風俗史年表 1945—2008』河出書房新社
 福田洋・石川保昌編著, 2011, 『図説現代殺人事件史』河出書房新社
 保坂正康, 2004, 『真説 光クラブ事件——東大生はなぜヤミ金融屋になったか』角川書店
 堀江貴文, 2005, 『稼ぐが勝ち』〈知恵の森文庫〉光文社
 間庭充幸, 1997, 『若者犯罪の社会文化史』有斐閣
 見田宗介, 2008, 『まなざしの地獄』河出書房新社
 山崎晃嗣, 2006, 『私は偽悪者』牧野出版(1950年の復刊)

その他の参考資料

- 「現代のファウスト——あげられた学生社長——」(『週刊朝日』1949年7月31日号)
 「学生高利貸しの遺書」(『週刊朝日』1949年12月11日号)

「光クラブ社長 山崎晃嗣日記」(『女性改造』1950年2月号)

小川徹「戦後史のアイドルたち④ 山崎晃嗣」(『潮流ジャーナル』1967年5月28日号)

梅原正紀「當代落ち目列傳 山崎晃嗣」(『流動』1976年7月号)

木村実「“アブレ合理主義者”の栄光と挫折」(『流動』1979年9月号)

保坂正康「三島由紀夫が嗤えなかった「光クラブ事件」の顔末」(『中央公論』2005年8月号)

「“革命児”堀江貴文よ、光クラブ事件を知っているか？」(『週刊文春』2005年4月7日号)

中野翠「満月雑記帳」529 (『サンデー毎日』2006年2月12日号)

藤原智美「倫理を揺るがせた元東大生たち」(『中央公論』2006年4月号)

「現役東大生高利貸し『光クラブ』山崎晃嗣の服毒死」(『新潮』45) 2006年5月号

「父の束縛を逃れて自由と青春を追求 日大強盗の愛人藤本左文の辿った道」(『サンデー毎日』1950年10月8日号)

「山際啓之 自動車ギャング事件主犯」(『週刊読売』1952年4月11日号)

戸川猪佐武「戦後女性史 4 戦後の混乱が生んだ白日夢」(『日本』1962年4月号)

「カンドウ神父と母の愛に蘇る魂の記録 メッカ殺人犯人正田昭の手紙」(『新女苑』1955年12月号)

「藤巻小太郎「メッカ事件執念の追跡」(『文藝春秋』1968年6月号)

「世にケイオーの名を高めた？ 3つの事件」(『週刊読売』1975年3月1日号)

(事件別、発行順)